

現代シニア用語事典

「人生九〇年時代」を生きることば

堀内 正範 著

元『知恵蔵』編集長

堀内正範著

『**丈人のススメ** 日本型高齢社会 「**平和団塊**」が**国難を救う**』（武田ランダムハウスジャパン刊）を

項目別に編集・補足

「**丈人**」 Ⅱ 「**三世代多重型社会**」を達成する「**支える側**」の高齢者。「**丈人力**」 Ⅱ 丈人層が保持する生活力。大丈夫！の感慨。 「**平和団塊**」 Ⅱ 平和の証としての「**日本高齢社会**」達成の中心になる戦後（一九四六～五〇年）生まれの一〇〇〇万人の若き高齢者層。

25x17 2012. 11. 01 稿

◎目次

- #1 「人生65年時代」の「二世代+**2**型社会」をどう生きる
- #2 高齢者意識と家庭内の高齢化対応
- #3 家庭用品の「途上国化」と「国産化」
- #4 新スグレモノと企業再リストラ
- #5 日本再生と地域の四季
- #6 人民・市民・国民・国際人として
- #7 「**人生90年時代**」の「**三世代多重型社会**」を**どう生きる**
- #8 おわりに ひとりの「昭和丈人」として

＃7 「人生90年時代」の「三世代多重型社会」をこう生きる

＃「日本長寿社会」はみんなできてる

・「丈人」と「丈人力」*・*

「丈人」

「丈人」という古語の意味合いを援用して、「老人」であるとともに「丈人」であるという多重性を意識して暮らすことを提案したい。率直な実感として「老人」と呼ばれて収まりがよい人ならそのままでもいいが、みずから高齢者と認めながらも、いま通用している意味合いで「老人」と呼ばれたくない、呼ばれるにはまだ間がある、あるいははなしに違和感がある、という人は多いだろう。そんなとき「丈人」と呼んでみる。聞き慣れないことばだから、はじめは違和感がある。だが、使い慣れるうちに「老人」よりは収まりがよくなる。みなさんを元気にすることばだからである。

「老人」であるとともに「丈人」であること。「老人」で

あるよりも「丈人」であること。心のおもむくままに使い分けられたいだけのこと。

「三・一一東日本大震災」のあとの被災地で、励ましのことばとして「頑張ろう！」がどれほど飛び交ってきたことか。それに「大丈夫！」と応じた人びと。

この「大丈夫！」の「丈夫」の「夫」の二をはずしてみてください。「丈人」です。「大丈夫！」ということが内にもつ感慨が「丈人」のものなのである。「頑張ろう！」が外向きなのに対して、「大丈夫！」は内にある力を呼びさましてくれる。

「丈人力」

青少年・中年期の長い期間をかけて積み上げてきた知識や技術やさまざまな能力を、「老人」として萎えさせてはいけない。人生を老い急ぐことになる。自分のためにはもちろん、青少年・中年期にあるみんなのために活用したい。「丈人」なら自然にそう思う。そうすることばでな

お発展・熟達・深化させようとして働く力がはたらく。体内からふつふつと湧いて出る強い生活力あるいは生命力がある。この人生を支える力を「丈人力」(Jojin ryoku)と呼ぶ。青少年や中年層からも敬愛される昭和生まれの高齢者のもつ力、「昭和丈人の丈人力」によって、史上初の「日本型高齢社会」は達成されるにちがいない。そのとき「Jojin ryoku」は、「tsunami」や「judo」とともに国際語の仲間入りをするだろう。

「春秋丈人」や「唐代丈人」

「丈人」ということばは造語ではなく、現代に呼びさまされた古語である。『論語』に詳しい人なら「微子篇」に出てくるから知っている人もあるだろう。孔子を「四体勤めず、五穀分かつたず、たれをか夫子といわんや」(身体を使つて労働をしないし、五穀を収穫することもしない。そんな人物を先生なんていえない) といつて批判する人物として『論語』に記されている。時代を批判する自分

を批判した人物を丁重にあつかっている孔子と、師をおとした人物を『論語』中に残してきた儒学のありようには留意する必要があるが、ここはその場ではないから深入りはしない。「春秋時代」の乱世を生きた「四体勤め、五穀分かつ」ことをよしとする老者を「春秋丈人」として認識しておけばいい。唐代には「唐代丈人」がいる。東岳泰山の頂上に立つ「丈人峰」のいわれが伝える「丈人」岳父は、これもその場ではないから触れないでいく。

「昭和丈人」

そこで「昭和丈人」である。元気でくらす高齢者を現役シニアと呼ぶようだが、「老人」と対比して使うなら横文字の「シニア」よりも漢語の「丈人」のほうが収まりがいい。「老人」であるとともに「丈人」であるという多重性はだれにでも納得できるだろうし、わかりやすい。「丈人」を意識することで、これまでの「余生」とは異

なった人生がはじまる。昭和生まれの「昭和丈人」が、平和の時代に得た長寿をどう享受して暮らすか。この国の新しい社会の体現者ということになる。

すべての高齢者を「社会保障」の対象である「老齡弱者（老人）に収めて温存してきた政策が破たん寸前になる。「人生90年時代」の健全な高齢者は、年金で暮らせなくなる。「昭和丈人」の出番なのである。若年者の負担にならず、逆に子・孫への「支える高齢者」（丈人）でなければ、高齢者への敬意は保てない。わが国の「高齡社会」を体現している「昭和丈人」の活動を、後人は敬意をもって見るようになる。いずれは総体として史上に新たな時代を切り開いていることに気づくことになる。

＊・＊「五つのステージ」をどう生きるか＊・＊

「長寿時代のライフサイクル」

「ライフサイクル」というと、ふつうには「幼年期」「少

年期」「青年期」「壮年期」「老年期」という五つの階層にわけて説明されてきた。この「五つのステージ」は、自分の経験として、あるいは子どもの成育の姿や父母の生き方をつうじて、だれもが納得できる分け方として認められている。ところが史上まれな「少子・高齡化」という状況にあつて、「高齡社会」の実情をつぶさに考察しようとする、上の「五つのステージ」ではうまく把握できない。なぜとって五つのうち三つまでが二〇歳代の「青少年期」に当てられていて高年齢に窮屈だからである。「高齡社会」の把握には、高年齢に配慮し高年齢者が納得する別途の「長寿時代のライフサイクル」が要り用なのだ。それが「高年齢の人生」への意識変革をもたらし、暮らしやすい新たなステージを創出する契機となる。

本稿がここでいう新たなライフサイクルは、「青少年期」「中年期」を過しおえて「高年齢」にあること、ずからが暮らしやすい「モノと場の高年齢化」を成し遂げ、「新しいしくみ」を創り出し、さまざまな分野の成熟し

た活動が展開される新たなステージだからである。と同時に、次の世代に将来の資産をつくっているという配慮をつたえて、みんなが参画しているという意識の共有が必要である。

東アジアの先進国であるわが国には、国際的なフロンティアとしてアジア地域での独自の社会モデルが期待されており、「日本高齢社会」は、自まへの経済・文化・伝統の条件のもとで、独自のプロセスを案出しながら達成に向かわねばならない。

「高年期三期の新ステージ」

わが国の高年齢化の実情をよく観察した上で、体現者である高年者のみなさんに納得されることを期待して、本稿が採用した「長寿時代のライフサイクル」は、「高年期」を三つの時期にわけている。高年前期(六〇〜七四歳)、高年後期(七五〜八四歳)、長命期(八五歳以上)で、ひとつの標準だから個人的に判断すればいい。

青少年期 〇歳〜二四歳 自己形成期

バトンゾーン 二五〜二九歳 選択期

中年期 三〇〜五四歳 労働参加・社会参加期

パレルゾーン 五五〜五九歳 高年期準備・自立期

高年期 六〇〜八四歳 地域参加・自己実現期

高年前期 六〇〜七四歳

高年後期 七五〜八四歳

長命期 八五歳〜 ケア・尊厳期

(自立・参加・自己実現・ケア・尊厳の五つは国連の「高齢者五原則」)

三つのステージは、二五年を区切りとする「青少年期」「中年期」「高年期」であり、「高年期」を三つのステージに分けることで、当面する自分の実情に見合った高年期人生のステージが形成されることになる。

同じ「五つのステージ」でありながら、高年齢を三区

分に厚く分類しているのに気づかれるにちがいない。これはどうやら「日本高齢社会」を考察する本稿の立場からは納得がいく。

自己形成期にあたる「青少年期（二五年）」と社会参加期にあたる「中年期（二五年）」の人びとは、改めて「高年三期」の存在の厚みに気づくであろう。「高年期」にある人びとは、いま自分が人生のどんな時期にあるかに思い当たるだろう。

「超高年期は第五ステージ」

先ごろ「後期高齢者」（七五歳以上）の医療費支払いが話題になって、七五歳で階層を刻むことの意味が問われたが、七五歳で截然として人生が変わるわけではない。それでも人生のステージとしての一階層上の高年齢期に達することが誇らしく愉快であるなら、とやかくいわれることはないだろう。七五歳に達したら、最良の医療を無料提供し、健丈で長寿である人生を支援しますという

施策であるなら誰も異議をとねえることはないのである。国の財政のしわよせを高齢者に押し付けようとする意図が透けてみえるような施策は、国際的にも関心を持たれている「日本高齢社会」構築のプロセスにあってはならないことだ。高年齢者はそろって憂慮の声をあげねばならない。しかし一方で、なにかの機能で「有訴」がはじまる時期であることには注意する必要がある。

本稿の高年時代の新ステージの特徴は、敬愛すべき「長命期」（八五歳から）を設けていることにある。「高年期」と「長命期」との刻みがなぜ八五歳なのかという刻みの整合性について異議をとねえる人があるかもしれない。ここでは「平均寿命」（女性）が八六・〇五歳であるという現実に留意しておいてほしい。まずは素直にご自分の人生と重ねあわせてみていただきたい。ここを越えれば長命のうちなのである。

「青少年期」「中年期」のふたつのステージを過ごし終えて、高年期になったいま属している職域や地域での「自

分のありようを見据えていただきたい。これからの行く先長い「高年期の人生」を過ごすことになる「家庭」「職域」「地域」という三つのステージでの自分のありようについて思いをいたすとき、「第三期」の現役シニアとしてさまざまな不足・不満・不安にも気づくはずである。

*・*国際化対応の第一・第二ステージ*・*

「青少年期・第一ステージ」

「即戦力正社員」

「青少年期」（〇歳〜二四歳）は「第一ステージ」で、青少年の暮らしのためには、育児・保育施設、学校、その他の教育施設、遊園地ほか、さまざまな「青少年のためのステージ」が用意され、次世代を育成するための「少子化特任大臣」が内閣府に置かれている。

人生の第一ステージである「青少年期」をみてみよう。

近ごろは結婚後一〇カ月目の「ハネムーンベビー」よ

りも、結婚前の「できちゃったベビー」が多いという世の中だから、生まれて以後の養育についても不確定な要素をもちながら推移することになるだろう。といっても子どもたちはみな、たいせつに養育され、学んで自己形成をして、選んで社会参加することに変わりがない。複雑な時代ゆえに、現状ではさまざまな選択のための猶予期間（モラトリアム）の「バトンゾーン（二五歳〜二九歳）」を置いて、一般的にはおよそ三〇歳前までが「青少年期」として許容されている。

しかし、本稿の「第一ステージ」の区分では、二四歳までにしっかりとした自己意識を確立し国際的な知識を身につけて、職業選択を終えて、若い柔軟な能力を發揮するチャンスを活かす青少年を想定している。国際化した企業が即必要とする人材（正社員）だからである。中国、インドほかのアジアの途上国の若いリーダーたちと伍して、その先頭に立てるような若き人材が要請されており、それが企業が求める「即戦力正社員」なのである。

すべての青少年が即戦力である必要はない。当面は三分の一ほどで対応することになる。

高年者としては、この孫世代の人びとにどう対処するか。みずからの来し方を省みて知られるように、自己形成期の「人生の第一期」にあつて、遠い「第二期の人生」での自己実現へとつながる「「ころろさし」(初志)を定めることは、放つておいてできることではない。「人生の第三期」にいる高年者(祖父母世代)として、「高年期のステージ」での存在感のある生き方を示すことによって、遠い先に遭遇する「第三期の人生」に安心感と可能性を与えることになる。

ということは、隠退して何もしないおじいちゃん、優しいばかりのおばあちゃんではなく、「高年期のステージ」の形成に参画しながら、なお未来を見据えて過ごしている先人であることを示すこと。ジュニアたちはそういう姿に接することで、高年者(祖父母)に敬愛の思いを持ち、時には記憶違いを直したりモノ忘れを助けたり、

緩慢な動作に付き合ったりしながら、何気ないふるまいやことばづかいの中に、人生の知恵やきらめきを見出し、て引き継ぐことになる。高年者を敬愛する立場をわきまえて育つ青少年の存在は、「日本高齢社会」の基盤であることはいうまでもない。

「中年期・第二ステージ」

「途上国化に耐える生活」

「中年期」(三〇歳〜五四歳)は「第二ステージ」である。急速な国際化に直面している中年世代の人びとのためには、多くの企業、自治体、団体などが総力をあげてその活動を支えるための場を用意している。それが国際化時代の対外的な国力として認識され評価されるからである。いま高年期にある人びとが中年期に粒粒辛苦して創り出してきたステージでもある。

急速な国際化に直面して、中年世代の人びとは内外のさまざまな不確実要素を引き受けながら労働参加をし、

次世代を生き育て、地域での要請に応じて社会参加もし、ヒマを上手につくって趣味や娯楽にも興じ、「キャリアアップ」にも心がけ、加えて高年期にいる父母の介護をするという「八面六臂」の活躍をして、超多忙な日々を送っている。とくに女性は変動期にある日本社会の基盤を支える「キャリア・ウーマン」として、口八丁手八丁となかなか力量が要るのである。就労のM型カーブの修正のためのワーク・アンド・ライフ・バランスは、個人・企業・社会的支援をあわせてはじめて可能になる。他項でも述べたが、この国にとっての何度かの外圧のひとつである「グローバル化」によって、中年世代は「暮らしを途上国化」して対応することになった。

わが国は先の大戦のあと、いま高年世代となっている人びとの労苦によって、アジアの他の国に先駆けて「一國先進化」をなしとげた。ひとときではあったが、だれもが等しく中流階級の豊かさを享受する「九割中流」の生活ができ、将来もできると予想した。先進国入りをし

たと思っていたわが国にとって、「暮らしの途上国化」は歴史の歯車を逆転して、これまでたどってきたある時期まで生活を後退させることになる。「グローバル化」というが実のところ、わが国には「途上国化」なのである。

アジアの途上諸国の人びとが、日本と同じ暮らしができることを期待し努力しているのだから、しばらくは耐えるしかない、高齢者は思うことで耐えられるが、子どもには苦勞させたくないという親ごころに育てられた中年世代の人びとには、ことのほかきびしい環境なのである。開発途上諸国の経済活動によって、日本企業は早急な途上国対応を迫られ、途上国産の日本ブランドの粗悪な生活用品を受容し、一方で企業の経営危機の負担を負う。家庭内の「暮らしを途上国化する」ことで対応してきたのである。

高年世代としては、わが国の若年・中年世代が海外の同世代と伍して能力を発揮できるよう、職場や権限をすみやかにシフトして環境を整え、事業を支援すること。

その上で、将来高齢化するアジア諸国の高齢者が求めるような製品・サービスを熟年社員と社友が企画・制作して次の時代に備える必要があるのである。これが「企業のリストラ（構造改革）の外向きにみた実質なのである。内向きにみて高年社員の被害者としての発言が目立つけれども、ここでは高年社員も企業現場の実態は実態として直視せねばならないのである。

・*第三ステージは時めき人生*・

「高年期・第三ステージ」

「五〇歳代・パラレル・ライフ」

「高年期」（六〇歳〜八四歳）が人生の「第三ステージ」である。その準備期にあたる五〇歳代、とくにその後半は「パラレル・ライフ」（ふたつの人生）で過ごすこと、高年期真っ盛りの六〇歳代へ繋ぐことになる。六〇歳代こそ「時めきの人生」である。

「高年準備期」に当たる五〇歳代というのは、どういう時期か。現状では企業内の「窓際族」が常態化してしまつて、残念ながら能力発揮の場所を見出せないままに六〇歳を迎えてしまう人も多い。いまや六五歳である。

この貴重な時期に手痛い停滞期間をつくらないように、五五〜五九歳までの期間を、長い高年期人生での課題（自己実現）の模索と移行のための期間として、「パラレル・ライフ」（ふたつの人生）を過ごすこと。五〇歳代はその後のわが人生への能力蓄積の助走期間として、けっこう多忙なのである。

五〇歳代にふたつの生き方を模索するというのは、ひとつはこれまで「労働参加・社会参加」してきた延長での生き方、もうひとつはこれから始まる「高年期の人生」での目標をさぐる生き方をあわせて実現することである。「パラレル・ライフ（ふたつの人生）」のフィフティーズ（五〇歳代）」とでもいうべき多忙な期間なのだ。

「職場の高年化」

「高年期職域異動」

五五〜六五歳の高年社員として職場でどうするか。高年者としての生活感覚を活かした「製品の高年化」を成功させて「しごとと職場の高年化」を試みる。あるいは「職場の高年化」を成功させて「製品の高年化」を試みる。その傍らでキャリアを活かして別な職域への「高年期職域異動」も考慮する。

地域ではどうするか。青少年や中年世代とともに生活圏の「三世代ステージ化」に努める。それらを通じて確めた高年期の自己目標への準備をする。大学の社会人学科でキャリアアップしたり、自治体の「地域生涯大学校」で地域で活かせる「高年者カリキュラム」を受講したりして準備することになるだろう。

こうした高年期の人生への準備期間として多忙なはずなのに、現状では活動の閑散期となっている。あまりにも惜しいではないか。

「自社製品の高年化」や「職場の高年化」や「地域の高年化」を課題として、「人生90年時代」の目標を模索して過ごしている高年社員に、若手・中年社員は激励されるだろう。また地域の人びとは、穏和なプロセスでの「まちづくり」への期待を寄せることになるだろう。

「団塊シニア」

思い起こせば、「団塊の世代」（一九四七〜四九年生まれ）と呼ばれる人びとは、「核家族」（一九六七年）や「昭和元禄」（六八年）や「エコノミック・アニマル」（六九年）などが騒がれた時期に成人となり、「大阪万博」（七〇年）を国民として満喫し、「脱サラ・ゴミ戦争」（七一年）と「列島改造」（七二年）にとまどいながら競争と選択の渦中で「労働参加」をし、さめた目で「企業戦士」のしんがりをつとめてきた。だから五〇歳代をすごし六〇歳に達して企業人としての活動を終えるに当たって、冷静に「高年期」の自己目標を見出して納得して実現を

めざすという方向転換にも柔軟に適應していくことができているだろう。

会社人間としては「窓際族」として黙々と耐えることもしてきたし、何ごとにも動じない。「パラレル・ライフ（ふたつの人生）」に折り合いをつけた暮らしが身についており、穏和なプロセスでの「高齢社会」形成への参加も道筋は自得するべきものと考えている。「団塊の世代」といわれてきたが、実は逆に団塊にはならない人びとなのである。企業は高年社員の能力保持を支援しつつ、市場開拓が期待される熟年むけ製品やサービスを、自社高年社員の自己実現として期待していいのである。

「地域」ではどうか。ここでも「地域」がもつ良さを探しながら、「パラレル・ライフ（ふたつの人生）」を過ごして高年期人生に道筋をつけることになる。「テーマ・コミュニティ」と「地域コミュニティ」との双方に足がかりをもって、なお現役として活動をつづけ、穏和で安定した「地域生活圏」での暮らしを成功させるだろう。い

まやおおかたの「団塊の世代」の人びとは「団塊シニアへ」の移行を終えようとしている。

「六〇歳代・時めき人生」

「生涯現役」

世間では六〇歳代を定年・還暦後の「第二の人生」とか「余生」としているが、本稿では新たな暮らしの場を形成して知識や技術や経験や資産を活かした「第三期の現役生活」として認識している。蓄積してきた知識、経験、資産などを滞らせることなく活用し、「六〇歳代（シクスティーズ）時めき人生」として過ごすには、引きこもってなんかいられない。

参考になるかもしれないが、唐の詩人白樂天は、六〇歳になったとき、「五十六は悪しからず、恬淡清浄にして心は安然」と詠っている。「三十四は五欲に動かされて迷う」しまた「七十八になると百病に纏われて苦しい」からだという。

「高年期の成熟人生」を謳歌し「社会の高年化」を體現する。ことあるごとに「もう歳だから」とつぶやいてみずから力を削ぎ、老け急ぐのは何としたことか。五〇歳代の高年社員と力をあわせて「成熟社会」を支える「製品の高年化」や「職場の高年化」といった「企業内の高年化」にも参加する。花が実となる時期にあつて力を出さずに終わってなんかいられない。

一〇年を超える「デノミネーション(萎縮)」でこわばってしまった巷の表層を割つて入れば、同じ高年期にある人びとの多くは、「高年期のステージ」について語る同世代の人の思いに必ず応じてくれるはずだ。

なぜとって、あの大戦後の復興期の混乱と貧困をともしのいで苦勞してきた者同士なのだから。それぞれが持つ力を惜しみなく限りなく發揮して、目前にある手つかずの障害をひとつひとつ乗り越えて、「高年期のステージ」の形成に努める昭和生まれの高年者を、ここでは敬愛の心を込めて「昭和丈人」と呼んでいる。ポルター

ジ(情熱の位相)をやや高めていえば、これから成熟期を迎える職域や地域生活圏のさまざまな場面で、「昭和丈人」である高年者の人びとが「丈人力」を發揮することで形成していくのが「日本高齢社会である」というのが、本稿の一〇年余にわたる洞察によるゆるぎない結論なのである。

自己目標の達成をめざす高年者の暮らしぶりは、その穏かな表情も、奥行きのある発言も、配慮の行き届いた行動も、温かな人柄も、青少年や中年者から羨ましがられるほどに魅力をそなえたものになるだろう。

世に稀でない「古希」を迎えても引き続き職域・地域での役割を求められる立場にある人も多いだろう。「自己目標」がそのまま職域・地域にかかわるものであるなら、「生涯現役」としての道を歩むことになる。すでにこういう「七〇歳代(セブntyies)・生涯現役」コースをたどっている先達を周囲に見かける。

＊・＊第四ステージからは意のまま人生＊・＊

「高年後期・意のまま人生」

「晨星のような長命期の人びと」

職域・地域での成果を後人に託しながら「自己実現の集大成」を果たすべく迎える「高年後期（七五歳～）・意のまま人生」というのが「第四ステージ」である。後人から敬意を受けて過ごす人びとである。しかしここでちよつと注意すべきは、このあたりから「有訴」がはじまり、医者がよいが増えるということである。「持病」とのつきあいが増えるという人生ということにもなる。この意のままにならない「からだ」の老化症候の推移を見据え、ものわすれ（認知症の進捗）にも気をくばり、緩慢になったふるまいにも納得する。

蟹江ぎんさんの娘さんたち四人の暮らし方に学ぼう。

健康で元気に暮らす秘訣は、「食べる（健康・からだ）」

「しゃべる（知識・こころ）」そして「自分でする・歩く

（技術・ふるまい）」だという。人生は自ずからしてなるもの、「無為自化の人生」という老子のことは、このあたりのことをつけているものようである。この年齢までたどってきた人にとってはじめて達意のことばとして感得されるものなのだ。

意のままにならないことを知ったうえで「無為自化」（意のまま人生）なのである。

「高年後期（七五歳～）」の人生にかかわることなら、聖路加国際病院名誉院長で、みずからは百寿期に到達された「明治丈人」の日野原重明さん（一九一一・明治四四年～）の独壇場である。日野原さんは、六〇歳からが「午後」の人生、とくに七五歳からの「高年後期」を創造的に意欲的に暮らし、自立した生き方を選択し、すぐれた文化を次代に引き継ぐ役を果たせる人びとを「新老人（ニュー・エルダー・シチズン）」と呼ぶことを提唱してきた。予防医学によって健康を管理し、リスク（危険因子）を避けながら積極的に生きる「新老人運動」の輪を広げて

いる。「新老人」の活動エネルギーは、本稿がいう「丈人力」と重なる意味合いの表現と理解している。

そしてさらに誇るべきは「超高年（スーパー・シニア期）」ともいえるべき「長命期」（本稿では八五歳〜）を過ぎ、しておられる人びと。その先に明け方の空にいつまでも輝きつづける「晨星のような長命期」を迎えてすごす人びと。この階層となった「大正生まれ」である方々は、一九四五（昭和二〇）年の敗戦には二〇歳から三四歳で遭遇し、奇跡ともいわれた戦後復興と成長の中核を担って労苦してきた。そして今、一人ぐらしでみとられずに亡くなるといった場にも耐えてすごしているのにながい。別のところでも記したが、子どものころに母さんが歌ってくれた「童謡」が繰り返し聞こえているにちがいない。この「人生の第五ステージ」期にある先達の営為と叡智に学ばなければ、国際的に注目される「日本高齢社会」の頂上（サミット）は成立しない。前人未踏の課題にともに臨みつづけてきているのである。

「高年期三階層のステージ」

「尊敬とともに生きる」

「高年前期」（六〇歳〜）「高年後期」（七五歳〜）「長命期」（八五歳〜）という「高年期三階層のステージ」を過ぎ、ごしている高年齢層の人びとが、家庭・職域・地域で共有して形成している社会構造が「高齢社会」であり、この国独自の経緯をたどりながら存在感を示すのが総体としての「日本高齢社会」の姿である。現状ではなお世界標準である途上国型の「若年・中年社会」は、このまま平和裏に推移することで世紀中葉には「国際的高齢社会」を迎える。国際的課題であるを見据えて、先進諸国の高年齢層の人びととともにひとつ上の世界標準を成し遂げるために、「日本型高齢社会モデル」を創出する。二〇世紀の奇跡といわれた「昭和時代」を担った人びとが、二一世紀初頭の奇跡といわれる「日本型高齢社会」をこしらえる。その気力も能力も備えている。

特別に変わったことをするわけではない。家庭内で、職域で、地域生活圏で、多様な経歴をもつ同世代の人びととの出会いを通じて、「人生の成熟」を実感しながら暮らすこと。愉快に日また一日を送ればそれでいい。

さまざまな分野で、それぞれの地域で、たぐさんの小さな水玉模様の暮らしの場を形成して「高年期」を過ごす。だれもが高年者であること、高年者になることに安心できる社会をめざす。

「日本高齢社会」は、こうして全国の津々浦々に暮らす高年者の人びとのたゆまぬ営為によって成立し、世界平和へのメッセージとして国際的な評価を得ることになるだろう。それは「一生に一度行ってみたい国、日本」の成立を示す証しとなる。それはまた二〇世紀中葉の戦禍によって犠牲になった人びとのかなわなかった長寿の実現である。そこにいたるプロセスは二一世紀の「人類標準IIヒューマン・スタンダード」ともなりうるものである。